

# からばす



Calebasse

企画/編集/発行 特定非営利活動法人  
カラ=西アフリカ農村自立協力会

デザイン:DeeplusDesigns

**第29号**(2013年4月1日発行) CONTENTS

- p1 カラの第2回毎日地球未来賞受賞に際して  
岡部 浩子(カラ理事)
- p2 青年海外協力隊としてマリとセネガルへ  
染谷 陽子(看護師・元青年海外協力隊員)
- p4 マリの人々の生活事情 代表 村上 一枝
- p5 現地活動報告
  - ①識字教師育成事業の継続
  - ②スウバ村診療所
- p6 ③村民対象識字学習  
④トウグニ地域助産師3人の育成と産院建設について
- p7 ⑤女性小規模貸し付け事業の発展
- p8 国内活動予定

## カラの第2回毎日地球未来賞受賞に際して

岡部 浩子(カラ理事)



カラを長年支援して、今回の受賞は本当に嬉しいことである。私はカラの代表の村上と大学が同窓というよしみで組織に関わっている。近年特にボランティアとかNPOという単語を耳にするようになったが、果たしてこのような活動はどれだけ社会的意味を持ち、成果を挙げているのか、また成果を得ることが出来るのか、と内心は疑問に思うことがあった。折に触れ、カラの活動報告を聞き「ソーなのか…」と思い、会での立場上カラの活動を多くの人に広報するよう試みたが、思うような発展を見ないことが多かった。多くの人にとって、目先のことや自分の世界のことが優先的に、またはそれだけが関心の対象であるような感じがしていた。

しかし、今回の受賞を機に発展途上国で我々が後押ししている支援活動の成果が認められ、評価されたことを改めて認識し支援する側には非常なモチベーションになった。

私がカラを支援するきっかけとなったのは、ある時期まで音信普通であった村上から「今、西アフリカから戻ってきたばかりなの、会いましょう」という突然の電話から始まった。その後マリで撮った写真を沢山見せられ、状況を聞き、現地の人たちの貧しい生活を想像し、その気にさせられてしまった。一緒に話を聞いていた亡き母も深い興味と感銘を受け、私たちの知らない世界に驚き、マリの人々にとって現実的に必要とされていることは、我々の専門分野である医療問題以前に、食料不足の毎日に何を食べるか、どのようにして収入を得るか、ということが大きな問題であると聞かされた。

そのことは深く胸に突き刺さった。よく耳にする、時間があるから、とか、ボランティアが好きだから、と言うこととは次元の違うボランティアとしての意識と活動であることを知った。

すっかりその気にさせられた私は、地元の八王子での講演会を何度か企画した。特に印象に残っているのは、八王子いちょうホールでのマリ国立民族舞踊団の公演が、圧巻であったことである。貧しい国にこんな素晴らしいものがあるのか、と改めて知らされた。ホール一杯の観客に胸をなでおろしたのが記憶に新しい。(P2へ)

開演直後の大音響のジャンベ、バラフォン、トーキングドラムの合奏、それに続くマリ各地に伝わる命の舞踊をダイナミックに演じていたダンサーの迫力、「マリの音楽と踊りは素晴らしかったね」と今も語り草になっている。

現地へ行った経験はないが、会への支援を機にマリ人スタッフとの交流を深めることが出来たのも、私には大きな出来事であった。

マリで現地の活動を責任を持って総括しているジャワラ氏、最前線にいるスタッフなど、代表の話を聞かされた時に思うことがある。それは、恵まれない状況の現地の人たちも私も同じ一生だと改めて自覚し、共に生きることを考えることである。日々の仕事に追われ、振り返ることなく流されがちな毎日ではあるが、カラが今回の受賞に与ったことが私の意識に何らかの変化を来していることは確かである。

それは、当然のことながらマリの人たちと共に生きていることを認識しながら、日々丁寧に生活していくことであるように思う。

## 青年海外協力隊としてマリとセネガルへ

染谷 陽子 (看護師・元青年海外協力隊員)

私は、平成23年1月から協力隊の看護師隊員としてマリへ派遣されました。そして、セネガルにも派遣されました。

最初はマリ共和国の第二の都市と言われているセグー市の州立病院に5S普及の目的で配属されました。5Sとは、整理・整頓・清掃・清潔・躰という日本語からなるもので、無理・無駄を省き業務改善を行うことでサービスの向上につなげる為の一つの手段です。

当初は一部の人に「注射もしないで何ができるの？ あなたのほうが間違ってるわよ。看護学校は卒業したの？ フランス語も出来ないの？」という目で見られ、挫けそうな日々が続きました。しかし病院長の理解と親切的な看護部長や5S委員に支えられて過ごすうちに、周囲も好意的になり仕事がスムーズに進みました。

通常、協力隊員は一つの国に2年間派遣されます。しかし私はマリで活動し、1年3ヶ月過ごした頃にクーデターが起きました。任地はほとんどいつもと変わらない生活でしたが、首都では発砲・暴動・街中でタイヤを燃やすなど危険な状況があり、JICAの指示により自宅待機。しかし一旦は活動再開の許可も降りたのですが、すぐに日本へ退避することになってしまいました。活動も少し軌道にのり、これから忙しくなる予定でしたのでとても残念で、後ろ髪をひかれる想いで帰国しました。しかも、急な指示のため配属先には帰国に関しては言う時間もなく、きちんとした挨拶ができず悔やまれてなりません。

その後任国振替を選択し、セネガルに派遣されたのです。セネガルでは第二の都市ティエス市の州立病院に配属されました。マリと同じように国内第二の都市の州立病院ですが、規模は全く違います。セネガルはマリよりも発展しています。病院の規模もマリの2倍ありました。

両国とも、日本からだけでなくキューバやフランス、イタリアなどからの援助を受けているので思った以上に設備が充実していましたが、精密機械が多い医療機器は取り扱いが雑で、しかも埃が多いため故障が多いです。技術者はいるものの、その知識・技術には若干疑問があり、医療の充実として機材の援助は必要だけでも、その後長く使っていけるように取扱い方、注意事項、故障した時の修理技術の提供や援助側の定期的なチェックのフォローがあると良いと思いました。



病院スタッフと染谷陽子さん

それに、援助された器材でも必要なもの

のは足りなく、あまり使わない器具がたくさんありました。診療所レベルをみると、援助が入っているところは救急車があってすぐに患者さんを移送できるが、援助が入っていないところは救急車もなく、十分な医療も提供できないままです。このように格差や援助の内容にも疑問を持ちました。

西アフリカの2カ国で生活をする、その違いをよく聞かれます。長い挨拶、家族のように接してくれる優しさ、歌・ダンス・サッカー好き、ピーナツをお供にお茶を飲みながらの談話、ゴミを平気でポイ捨て、整理整頓が苦手、自国以外の食事は受け入れ難い、などは共通する点です。セネガルはウォロフ語が主な現地語ですが、一部の地域ではマリのバンバラ語と同じ言葉を話す部族がいて、セネガルでバンバラ語が聞こえると、妙に親近感を覚えてうれしい気持ちになりました。食事あまり変わりませんが、セネガルの方が油やコンソメの使用量が多いです。セネガル食も美味しいのですが、日本人にはマリ食の方が合っていると思います。セネガルの病院の前には屋台が何軒もあり、そこでサンドイッチを買ってよく食べていましたが、一番美味しいと思った屋台はマリ人のお店でした。やはり食が合うなど感じました。

違う点はちょっとした人間性でしょうか。マリの素朴な人柄とは違い、セネガル人はいい意味、悪い意味も含めて洗練されていてプライドも高いように思います。

最初に滞在したマリの方をどうしてもひいき目で見えてしまいますが、活動をする上ではどちらも良い理解者・協力者がいたので良い経験をさせてもらいました。活動が中途半端になり、やりきった感じはありませんが、二カ国での活動を経験できたことはラッキーでした。いつかまた現地に行って、きちんと挨拶をし感謝の言葉を述べたいと思います。

現地には多くの医療面での支援が必要です。人材も不足しています。私の分野でも、特に彼らの不得意とする5Sについての普及が必要と思いました。

## マリの人々の生活事情

村上 一枝

カラがマリ共和国の農村部で支援活動を始めてほぼ20年が過ぎました。

現在までの間、種々な事情が発生し、その都度できる限り対応し支援を続けてきました。しかし、昨年お正月頃から散発的に発生した北部の騒乱は、現時点でも未だ解決のめどを見ないままに経過し、現在はバマコ市の在マリ日本大使館は閉鎖されたままとなり、私のマリへの渡航も禁止されています。

現在はバマコの気温が平均45度で停電も多いため、時としてメールでの連絡も思うように届きません。時々断水の日もあり市民は日常生活に苦勞をしているようです。日本からの銀行送金やマリからの郵便による報告書等も東京事務局へは届いています。

カラの事業地は戦闘地域から遠く離れているため、事業はジャワラの監督下で計画通りに何ら問題もなく進んでいます。現地スタッフと事業の進捗状況や今後の計画の打ち合わせが必要ですから、2012年12月12日から10日間、隣国のセネガルの首都ダカールに出向き、そこへスタッフ3人をマリから呼び寄せて仕事をしました。

毎月の事業報告書を見て気付くことは、現在JICA資金で進行中の識字教師の育成研修会への出席率が非常に減少していることです。公用語であるフランス語を小学校の教師から学ぶ、という絶好のチャンスに青年たちは家庭の事情で出稼ぎに行く羽目になってしまったからです。このことは、現在90ヶ村以上の村で開催されている夜間の村人対象の識字学習への欠席者数も減少しているのと同じ理由です。

出稼者は殆どが男性中心で、奥地の村に行くほど多くなっています。一度村を出ると短くても1年間、またはそれ以上の年月帰省しないで収入を送ってくるようになります。降雨量の減少、国内の騒乱で物価が上がり、食料の不足を来しますから、家族の命を背負って働くこととなります。しかしカラの活動地域ではこの出稼ぎをとっても、以前多かった若い女性の出稼ぎ者が非常に少なくなりました。アワがいつも言うように、それは縫製や編み物の技術を会得し、販売や依頼による収入が生活の支えとなりえてきたという理由です。

カラの村出身の青年スタッフたちには、現在出稼ぎに行く青年はいません。少なくとも確実に家族の1ヶ月分の主食を購入できるくらいの給料を得ているからです。例えば村のベテランスタッフは給料が40,000cfa(7,500円前後)です。この価値は、トウジンヒエを高値の3月時でも300kgは購入できます。これは、15・6人家族の1ヶ月の主食代を賄える額です。さらにもし主婦が野菜栽培や貸し付け事業に参加しているなら生活にゆとりが出てきます。

自然環境の厳しい条件下での生活は、単一の方法で収入を得るだけでなく、複数の方法で収入を得ることが必要です。そのようなことを考えると、カラの活動で主婦の間での野菜栽培や女性適正技術が自然に発展していくことに納得がいきます。これらの女性対照の事業はカラの事業の限界を超えて、女性の生活の一部になった感があります。

2013年度の現地出張もダカールへの渡航となる見込みです。しかし我々日本人が現地へ行かなくても、現地スタッフだけで活動を進めている状況は、彼らスタッフの村人の指導者としての気構えが強まり、意識が高っていくことと期待しています。

日本国内でも、大きな嬉しいニュースがありました。

恒例のカラのコンサート「かけはし2012」には多くのお客様がお出掛けくださり、とても好評を博しました。

そして2013年1月にはカラの活動が「第二回 毎日地球未来賞」を受賞したことです。

多くの方々のご支援に支えられ、マリでの支援活動の成果が認められたことだと思います。この場をお借りしてご支援くださった皆様に深くお礼申し上げます。この賞は明治学院大学勝俣誠教授のご推薦によるものです。2月19日の授賞式当日は関西の会員の方々、勝俣先生、役員1人、東京事務局スタッフと私が出席しました。授賞式後に行なわれた講演会で、カラの活動をご紹介する機会にも恵まれました。その後には、時折カラの活動が毎日新聞紙上で紹介されています。

3月6日は活動の特集記事が掲載されました。私どもは、今後も出来る限りの支援活動を続けてまいります。

今後とも皆さまのご支援を頂戴いたしたくお願い申し上げます。

## 現地活動報告

2012年11月～2013年3月



## ① 識字教師育成事業の継続

JICA支援によるこの活動は、雨季の3ヶ月間を休講とした年間9ヶ月のフランス語研修コース(参加者186人)と、3月と12月の年2回・1回10日間開催のバンバラ語研修コース(参加者88人)があります。いずれのコースにも参加人数外でボランティアの参加者もいます。

フランス語コースは、2012年10月から小学校3年生程度の学習が始まりました。

この研修における問題は、やはり研修生の欠席者が多くなったことです。研修は小学校教師の休日の土・日の2日間連続で月に合計8日くらい実施されます。欠席の理由はやはり出稼者の増加です。研修会の総括を行なっているスタッフのスマイラは、常に同じ研修生が遅刻してくるのも問題で、いくら注意しても遅刻すると嘆いています。研修生は村の代表の意味もありますから、その点の責任も考えるべきとスタッフたちは話し合っていますが、どうしてもその意識に欠けているようです。

2012年12月には小学校3年生程度の研修が始まって3ヶ月が経過したので試験を行いました。この試験の結果は80%以上が合格点でした。

バンバラ語の研修会は12月に10日間開催されました。この研修会ではやはり最後の日に試験を行いました。

参加者の88%の研修生がディナフィラ規定の合格点に達していました。今回の研修会では、短い文章を作成するようにしました。1研修場で2・3人の研修生しか文章を作ることが出来ませんでした。その殆どは農繁期終了時に村で組織したお祭りが楽しかったことを書いていました。彼らにとって最高の楽しみはタムタムに合わせてダンスをすることのようです。



手拍子で踊る女性



## ② スウバ村診療所

2012年4月に開設予定であった、日本外務省の資金で建設したスウバ村診療所がやっと2月20日開設の運びとなりました。

昨年4月5日に開設を予定していましたが、クーデターが起き実現できず、内定していたドクターも身の危険を感じ勤務出来ないということでした。地域保健省からは医者がいなければ開設を許可しないといわれ、村にとっては最悪の事態になっていました。

現在、サハラ地域では、政府から給料は出ているものの休職となっているドクターが沢山いるのです。停戦後に診療所を再開する為に確保しているからです。スウバ村には既に育成して研鑽を数年積んだ助産師と看護師がいるため、2人で開設できるように地域の保健省に村から幾度となく交渉しましたが、許可してくれませんでした。しかし、診療所を建設した理由を述べた嘆願書を12月にカラと村が連盟で保健省に提出し、2013年2月にやっと看護師と助産師だけで当分の間診療所を続けていく許可を得ました。この診療所の開設は、特に女性には安全な出産が望めますから大きな助けとなるはずで、今後はこの診療所の状況を随時お知らせできると思います。

### ③ 村民対象識字学習

新規に建設された10ヶ村の識字教室も含めて、多くの村で識字学習が継続しています。ここでの問題も出稼ぎ者が多くなり欠席者が増えたことです。カラの活動は村の人々の生活に影響しないように進めていますから仕方ないことと思っております。しかし、識字教室で覚えた文字で出稼ぎ先から手紙を出すとか、日常生活で役に立つようになれば支援側は嬉しいことです。まだ教室の整わない村での識字学習も行われています。これは、勉強する姿をカラにアピールして教室の建設を望んでいるのです。

クーラ地域とトウグニ地域の識字学習への参加者数を比べると、クーラ地域では2013年1月の識字教室への出席率が80.8%なのに対し、トウグニ地域では同じ条件で47.5%の出席率です。年間降雨量の少ない地域の人ほど出稼ぎに行く傾向が高く、出稼ぎ先は国内の大都市もありますが、国外への出稼ぎ者が多数です。

カラはこの識字学習を1993年から続けていますが、特に近年は女性の参加者が増えてきたこと、また識字教室が昼間には小学校の教室として利用する村が多くなってきたことが目に付きます。教室が足りない村では、識字教室の横に村人が囲いを作っただけの場所で1年生が学んでいる村もあります。



識字教室(右)と簡易教室



作物のからで覆われた教室

### ④ トウグニ地域助産師3人の育成と産院建設について

写真の女性3人が新規に育成した助産師です。向って右からママブグー村、コニナブグー村とキバ村から選ばれた女性たちです。1月末には1年間の研修が終了して村に戻るはずでしたが、昨年クーデターがあり、時々バマコ市内で外出禁止令が発令され、診療所へ行くのも危険だった為、十分に学習できない日が続きましたので、研修の日数を3週間増やしました。彼女たちを待ち受ける村の産院の建設はまだ完全に終了していません。やはりクーデターに左右されてトラックがセメントをマリへ運んで来ることが出来ないのです。

少しずつこの状況も改善されていますから、数ヶ月後には新しい産院が開設されます。産院へ運びこまれるベットや分娩台、薬剤、器具は全て購入してバマコ事務局の倉庫に保管してあります。



3人の助産師

### ⑤ 女性小規模貸し付け事業の発展

2002年から続いている女性を対象とした貸し付け事業の返済が12月に行われました。以前にも幾度となくご報告しておりますが、この資金を利用して女性たちは小商いをし収入をコツコツ蓄え、家族の為に、また子供のために役立てています。

今回の貸付金の返済時には、2002年に9人の女性からスタートしたコニナ村女性委員会は、参加者91人中65人の10年以上もこの事業に参加していた女性たちが14,000cfa(約2,500円)を分け合い、貸し付け事業から脱退し独立しました。彼女たちは、各自が事業を進めていくということです。

従来の女性委員会はそのまま継続され、改めて26人が1人貸付額5,000cfa(1,000円弱)を借り受け、改めて貸付事業を引き継ぐことになりました。

この26人の女性たちは一人当たり5000cfa(915円)を5ヶ月間借り受けます。彼女たちの多くは、毎日の調味料の販売、適正技術で習った刺繍や編み物、また子供をおんぶする時の布の縫製材料を購入しています。毎日使う塩やスープの素を仕入れて販売する女性もいます。5ヶ月間の収入は各自1,500cfaくらいではないかと思えます。1,500cfaは多い収入では在りませんが、主婦にとっては貴重な財源です。



返済金決算日、返済金が洗面器に集められています

講演会「西アフリカ、マリ共和国の農村を支援して～20年の歩み～」  
人々との生活を共にして得た支援の成果や反省など・・・、村の人々の自立する姿について。



2013年4月14日(日) 13:30開場 14:00開演  
会場:八王子市学園都市センター 第5セミナー室

報告者:代表・村上一枝 特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会  
お問い合わせ tel:0422-29-7640 mail:centre@ongcara.org

## 国内活動

- 11/3 【紫波会】にて活動紹介 東武ホテルレバント東京
- 11/11 【第32回 むさしの青空市】にて活動紹介 武蔵野市民公園
- 11/14 『世界に一步踏み出そう～アフリカを感じよう～』  
公益財団法人 武蔵野市国際交流協会(MIA)主催【青年ワークショップ】にて講演 MIA会議室
- 12/2 カラ主催 チャリティコンサート【かけはし2012】 銀座・十字屋ホール
- 2/19 【「第2回毎日地球未来賞」表彰式 及び 受賞記念講演会】 毎日新聞・大阪本社 オーバルホール
- 3/7 仙台Iゾンダクラブにて講演 仙台市国際ホテル
- <2013年4月以降の予定> \*変更になる場合がございますので、詳細については事務局までお問い合わせください。
- 4/14 講演会【西アフリカ、マリ共和国の農村を支援して—20年の歩み—】 八王子市学園都市センター 第5セミナー
- 5月未定 アフリカンフェスタ2013 横浜
- 5/18 明星大学にて講演 明星大学
- 5/19 【東京白梅会】白梅会東京支部総会